

ルソーの夢

—むすんでひらいて考— (その六)

海老沢 敏

五、クラマーの《ルソーの夢》

前章に《グロヴ音楽辞典》第二版の《ルソーの夢》の項目を
訳出紹介したが、この辞典初版にみられるグロヴ自身の説明に
は、第二版の「」内の説明が当然ながら欠けているほか、さら
にいくつかの異同がある。そのひとつは第二版にみられる「この
旋律は《村の占師》の第八場の《パントミム》に出てくるもので
あり、次のようなかたちである」という説明がないこと、したが
って《パントミム》の譜例が掲げられていないこと。もうひとつ

は「《夢》というタイトルの由来は明らかでない」という最後の
文章はなく、その代りに次のような文章が置かれていることであ
る。「このエアがルソーのものかいなかを執筆者が確認していな
い。彼の《わが生涯の悲惨の》慰め》(パリ、一七八一年)には
含まれていない。」

ここで参考までに、現在流布している第五版についても触れて
おこう。この版では、この《ルソーの夢》の項目は次のように修
正されている。「十九世紀初期に英国で大いに人気であった曲。
これは讚美歌の節として用いられ、それにもとづいてJ・B・ク

ラーマーがヘビアン・フォルテのための主題と変奏曲、デラウエア伯爵夫人のために作曲、献呈……) (ロンドン、チャペル、一八二二年)を書いた。それは次のようなかたちをとっている(前章の譜例1)が、これは明らかにジャン・ジャック・ルソーの《村の占師》(一七五二年)のなかのさる舞曲の変形であり、《村の占師》では《ベントミム》のタイトルのもとに次の譜例のようになっている(前章の譜例2)。これが、一七六六年、ロンドンのドゥルリ・レイン劇場で《賢い男》のタイトルで上演された《村の占師》のバーニーによる翻案を介して英国に入ってきたことはほとんどたがいない。この曲はまた、以下の歌詞(これは譜例のリズムをわずかに変えている)がついた子どもの歌としても知られている。《おやすみ、私の幼な子お嬢さんのようにおやすみ／牝牛が戻ってきたら、ミルクがもらえるよ》

ちなみにグローヴの初版の当該巻は一八八三年刊、そして第五版は一九五四年の出版である。

これらグローヴの辞典の記述からおよそ次のような《ルソーの夢》のイメージが浮び上ってくるのだらう。第一に、すでに述べたように、この曲が、十九世紀初頭の英国で流行していたこと。しかし、《ルソーの夢》という名前ではじめて出てきたのはヨハン・バプティスト・クララーマーの変奏曲のタイトルだと思わ

れること(第五版をのぞく)。このクララーマーの変奏曲の出版年は一八二二年となっているが、それより四半世紀ほど前の一七八八年に、この曲の旋律の異稿が《メリッサ》というタイトルで出版されていること。この《メリッサ》の旋律は、グローヴ自身の調べでは、ルソーの歌曲集《わが生涯の悲惨の慰め》には見当らないこと。第二版以降の記述では、この《メリッサ》の旋律は《村の占師》の第八場の《ベントミム》に見出されること。《メリッサ》の旋律が英国に入ってきたのは、チャールズ・バーニーが一七六六年にルソーのオペラをロンドンで編作上演したことがきっかけであったと思われること。さらには、この旋律が讃美歌に改作されたか(第二版)、あるいは逆に讃美歌からクララーマーが自作の主題に取り上げた(第五版)こと。以後、讃美歌としてポピュラーになったこと。さらに子ども歌としても知られていること、以上である。

いずれにせよ、グローヴの辞典のこの項目の中心に据えられているのは、《ルソーの夢》なるタイトルをもったクララーマーのピアノ変奏曲である。私たちも、まず、この作品に一瞥を加え、その上で、そこを基点として、史的な探索を試みてみよう。

ヨハン・バプティスト・クララーマー(一七七一一—一八五八)は、マンハイムで生れ、ロンドンに没したヴァイオリン奏者ヴィ

ルヘルム・クラマー（一七四五——一七九九）の長男であり、おなじくマンハイムに生れ、ロンドン（ケンシントン）に世を去ったピアノ奏者である。彼の名は、現代の私たちには、おそらくはもっぱらヘクラマー＝ビュローウで知られているといえよう。これはクラマーの《練習曲集》をドイツの音楽家ハンス・フォン・ビュローウが編曲刊行し、これがピアノ学徒にとって欠かせない教則本となったものであり、音楽の専門教育界ではまことに名高いものであったからである。

そのクラマーは幼くしてロンドンに移り、カール・フリードリヒ・アーベル（バッハの末子ヨハン・クリスティアンの同僚としてロンドンで活躍し、モーツァルトにも影響を与えたドイツ系音楽家）やムツィオ・クレメンティ（モーツァルトと競演したこともあるイタリア系ピアノリスト・作曲家）などに学び、はやくも十歳で公開演奏の場に登場し、以後、長年に亘ってピアノのヴァーチュオーソとして活躍した存在であった。ロンドンを舞台としてはなかなか演奏活動を試みたばかりか、しばしば大陸でも演奏旅行をくりかえし、その名はヨーロッパ各地にあまねく知られた。ヨーゼフ・ハイドンとも親しく、また同世代のベートーヴェンとも近しかった彼は、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、ロンドンのピアノ教育界にはなくてはならぬ人物であり、多

くの教則本を刊行したばかりか、協奏曲、室内楽曲、そして独奏曲などまことに数多くのピアノ作品を残している。彼のピアノ協奏曲四およびピアノ・ソナタ（二〇五曲も数える）はヴァーチュオーソとしての彼の欠かせぬレパートリーであったし、彼が残したこれまた無数の小品は、専門のピアノ奏者たちのレパートリーであったとともに、ピアノの演奏をたしなむ音楽愛好家たちの愛好曲ともなったのだ。

クラマーはまた楽譜出版者としても知られている。彼は一八二四年、J・B・クラマー社を設立しているが、これに先立って、一八〇五年ごろ、クラマー・アンド・キーズ社の共同経営者であり、かつ、一八一二年には、英国の著名な音楽出版者サムエル・チャペルのパートナーとなっている。《ルソーの夢》は、このチャペルからおなじ年に刊行されているのである。

すでにグローヴの辞典の項目でも紹介したように、クラマーが作曲したこの作品のタイトル・ページには、ヘルソーの夢。ピアノ・フォルテのための主題と変奏曲、J・B・クラマーにより作曲され、デラウエア伯爵夫人に献ず。ロンドン、楽譜楽器商チャペル社印刷・販売、ニュー・ボンド・ストリート二四番地と印刷されている。（注上）（図版1）

（注一）《Rousseau's Dream. An Air with Variations for the

Rousseau's Dream.

An AIR with

Variations

for the

PIANO FORTE.

Composed and Dedicated to

THE RIGHT HON.^{ble}

The Countess of Leinster

BY

J. B. CRAMER.

London

Eng^l at Sta Hall

110-3

Printed & Sold by Chappell & Co. Music & Musical Instrument Sellers.

124. New Bond Street.

Piano Forte. Composed and Dedicated to the Right Honble.
The Countess of Delaware. By J.B. Cramer. London. Printed
& Sold by Chappell & Co. Music & Musical Instrument
Sellers: 124, New Bond Street.》

この曲は、このチャペル版の初版が発売されてから、十九世紀一杯にかけて、まことにポピュラーな愛奏曲となり、英国ばかりでなく、ヨーロッパ大陸、とりわけフランスとドイツで大いにもてはやされたものと思われる。なぜなら、各種の文献目録あるいは図書館所在目録にみるかぎり、そして私自身の調査によるかぎり、主としてドイツおよびフランスの音楽出版社が競って、この変奏曲の楽譜を出版しているからである。ドイツの著名な出版社ブライトコップフ・ウント・ヘルテルあるいはジムロック、そしてフランスのジャーネ・エ・コテルをはじめ、ルモワース、コスクラ、ウジエル、ジュベール等々の名を挙げるだけで十分であるう。

これほどにも十九世紀にもてはやされたクラマーの《ルソーの夢——主題と変奏曲》は、それではいったいどのような作品であるうか。つづいて、この曲の特徴を簡単に説明してみることにしたい。

曲はまずアンダンテ・ノン・タント、八分の六拍子の〈導入

部〉で開始されるが、〈長調をとるこの曲の曲調が、この〈導入部〉ではっきりと提示される。やがて提示される主題の動きを予感させるような調へが、技巧的なパッセージを喜んで奏され、最後のカデンツァ風のパッセージでしめくくられる。

そして《ルソーの夢》と英語で題書された主題（アリア、モデラート）は、〈長調、二分の二拍子をとる、譜例1（次頁参照）のようにもたらされるのである。私たちになつかしい〈むすんでひらいて〉の旋律は、こうしてクラマーの手で、このようなかたちで音楽史にその姿を刻んだのである。この主題の音楽的特徴やその後のこの旋律の異稿との比較については、さらに後章にゆだねなければならないが、装飾的な分散和音によってはじまり、三度や六度の音程関係を維持して進むこと、いずれも繰り返される四小節および八小節の二部分からなるものながら、音楽的にはA—B—Aのかたちをもっていることなどが指摘できよう。さらに曲調は〈長調という調号との関係から、のどかさ、のびやかさ、そしてかろやかさといった性格があらわである。

さて、この《ルソーの夢》なる主題にもつづいて、つづいて合計一〇曲の変奏曲がクラマーによって作られている。第一変奏は、主題がオクターヴ高く奏され、かつタンソその他装飾的な動きが加えられている。第二変奏は右手の十六分音符のこまかな装

ROUSSEAU'S DREAM.

ARIA
MODERATO

The musical score is written in G major and 3/4 time. It begins with a vocal line in the upper staff, marked 'ARIA MODERATO'. The piano accompaniment starts in the lower staff. The score includes several variations: 'Var. 1' (marked 'Soft Pedal'), 'Smorz.' (ritardando), and 'Var. 2'. The piano part features intricate textures, including sixteenth-note patterns and dynamic markings like 'dim'. The piece concludes with a final cadence in the piano part.

▲譜例 1

節的動きの中に主題が立ち現われ、一方、左手はこれに対位的な動きをひくく添えていく。そして第三変奏。スケルツァンドと、いくぶんおどけたスタイルで書かれたこの変奏は、三連音とスタッカートが組み合わされて、これに対応する左手の動きの中で、主題が変形されている。第四変奏は右手が高く奏するトリルや左手のひくくうなるような六連音の動きの中で、もう一方の手が主題を忠実に歌っていくかたちがとられている。

第五変奏は三連符の三度音形が右手で奏され、これに左手が合の手を入れるのである。第六変奏は右手が高い音で、休止符をさしはさんだかろやかな音形を奏していく形がとられる。第七変奏は右手と左手が織りなすこまやかな織り物である。そして第八変奏はヘコン・グラーツィア（優美さをもって）で、三度と六度のかろやかな音形が奏される。第九変奏では、左手のスケールに乗って、主題がフォルテで奏されるが、最後の第一〇変奏になると、アレグレット、八分の六拍子とられ、三度音形とこまかなパッセージが交替し、最後は技巧的なパッセージが、この変奏曲全体をしめくくるのである。

一般にこうした変奏曲では、一曲は短調、いわゆるミノーレの変奏曲がさしはさまれていて、全体の印象に影を含む工夫がこらされているが、クラマーのこの作品では、短調の変奏曲がな

く、したがって、作品全体も、主題ののびやかな印象を、くりかえしくりかえしひたすら敷衍するのみである。この作品が、十九世紀のヨーロッパの音楽的な家庭でひろく愛弾されたのは、この曲につけられた「ヘルソーの夢」というタイトルが与えるさまざまなイメージともどもに、とりわけこの曲のかるやかでのどかな情調が抵抗なしに受け容れられたからではないかと推察されるのである。

このクラマーのピアノ変奏曲は、こうして、十九世紀の十年代の音楽界に姿を現わし、その後も愛奏されて、ひろく人口に膾炙したものであったが、^(注2)それにとどまるものではなかった。しかし、ここでは、クラマーが主題として取り上げた「ヘルソーの夢」の旋律のその後の命運を辿っていく前に、グロウヴの辞典で取り上げられていた異稿としての「メリッサ」など、この旋律の前身や由来についてまず語らなければならぬだろう。

(注2) このクラマーの「ヘルソーの夢」変奏曲の日本における初演は、昭和五十三年十月二十八日(土)に東京のヤマハホールでもよおされたルソー没後二〇〇年記念演奏会(音楽家ジャン・ジャック・ルソーの夕べ)(昭和五十三年度文化庁芸術祭参加)で、小川京子のピアノ独奏でおこなわれた。

(国立音楽大学)